アジア・アフリカ地域研究 第 11-1 号　2011 年 11 月
Asian and African Area Studies, 11 (1)

フィールドワーク便り

爪の隙間から毒を盛る

──北東インド国境地帯における毒の言説をめぐって──

長　岡　　慶 *

「タワンへ行くのなら，毒に気をつけなさい．爪の隙間からこっそり食事に入れられるんだ.」

チベット難民が多く暮らすダラムサラ（インド北西部）でのことだった．文房具屋の店主が放った一言に，私はぎょっとした．店主は，真剣な目で，爪につめた毒を食べ物に入れる動きをしてみせながら，「タワンの村では，招いた客の食事に毒を盛って命を奪う」と語るのであった．タワンとは，私がこれから向かおうとしていた調査地の名前である．以後，数人のチベット人から同様の話をきくこととなった．滞在するアパートの大家さんは，それを「ブラックマジックだ」と言い，「30 年前，兄がチベットのスパイとしてタワンに潜入したとき，毒を盛られて死にかけた」と語った．また，持っていたチャイのコップに，大家のおばあちゃんも爪の隙間から毒を入れる素振りをしてみせるのだった．

山の街，タワンへ

私は，ダラムサラで約 4ヵ月チベット語を学習した後，2010 年の 12 月から 1ヵ月間，インド北東部のタワンという地域へ調査に赴いた．本稿は，そのときに人々の間で語られた毒の言説に焦点をあて報告するものである．また，本稿に登場する「毒」は，語り手が使った「*dug*（毒）」（チベット語）という言葉を直訳して用いている．

タワンは，アルナーチャル・プラデーシュ（以下，A.P.）州内の高地にあり，Monpa（モンパ族，モン族，ムン族など邦訳はさまざま）というモンゴロイド系の民族が暮らしている（写真 1）．インドの地にありながら彼らの多くはチベット仏教を信仰し，チベット建築の僧院が数ヵ所に建っている．タワンはまた，西がブータンとの国境，北が中国との国境（マクマホンライン）に接する国境地帯でもあり，インド軍の基地が多くみられる．

私がこの国境地帯まではるばるやってきた理由は，そこに，チベット医学の中心組織「メンツィカン（Men-tsee-khang）」（ダラムサラを拠点とするチベット亡命政府の所属機関）の分院があったからである．チベット医学の展開を研究テーマとしていたため，亡命政府から遠く離れた周縁に位置する Monpa 社会にあって，チベット医学がどのように実

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

写真 1　市場で出会った Monpa の女性
ヤクの毛でできた帽子，カイガラムシの分泌物ラックで染色した民族衣装を身に着けている（2011 年 1 月撮影）．

写真 2　山道を行く尼僧
（2010 年 12 月撮影）

践されているのかを調査しようと考えていた．

A.P. 州内に入るためには特別入域許可書が必要で，最大でも 1ヵ月しか滞在することができない．それゆえ，タワンに海外からの旅行者はほとんどおらず，代わって，インド軍人や迷彩柄の大きなトラックが街を行き来する．自動車やタクシーは少なく，地元の人々はひたすら歩き続けるか，知り合いの車が通り掛かれば手を挙げ，相乗りして市場や村を移動する（写真 2）．

タワンのチベット医

タワンで出会ったチベット医のＴ氏は，タワン出身の Monpa で，ダラムサラにある大学を卒業後，地元に戻って分院での診療をまかされた．今年で 10 年が経つという．40 歳代の物腰の落ち着いた人で，8 歳になる娘と 3 歳の息子がいた．

オールドバザールにある診療所は，モスグリーンの小さな建物でなかに入ると，待つための長椅子と薬局があり，チベット人女性が 1 人働いている．奥に診察室が 2 つあって（現在，常駐医師はＴ氏 1 人のため 1 室は閉まっていた），Ｔ氏の部屋では，薪ストーブがたかれ，机とベッドがあり，壁にはダライラマ法王の写真と薬師如来の絵がかかっている．調査中，診療所に訪れたある Monpa のおじいさんは，診察後，この写真と絵に向かって神妙に手を合わせ祈りを捧げていた（写真 3，4）．

一般にチベット医は，病を診断するとき両手首の脈を診る．Ｔ氏も患者の脈をとりながら会話をし，問診，視診などを行なっていた．血圧が気になる人には，血圧計を用いて測ることもする．診断に困った時はどうするのだろうか．Ｔ氏はこう語った．

「どこの出身かきくと，診断がしやすくなる．チベット医という仕事は，村の地理を知っていると少しやりやすくなるんだ」

写真 3　診察風景
（右がＴ氏．2011 年 1 月撮影）

写真 4　診療所の外観
（2010 年 12 月撮影）

彼によると，タワン周辺に点在する村々は，Monpa のほかに，チベット人が多く住む領域やブータン人が多く住む領域などに分かれており，それぞれ気候や食習慣，従事する主な仕事などが異なっているという．それゆえ，一見同じような症状の病気でも，その人の暮らす土地がどこかによって原因が異なり，治療法や薬の処方が変わってくるというのである．たとえば，豚肉を多く食すブータン人と，豚肉は食べず干し魚を好んで食べる Monpa やチベット人とでは，同じ腹痛でも原因が違う（前者は *bu*（原意は虫）による腹痛，後者は古いものを食べたことによる腹痛），といった具合である．その他，A 村では川での土木工事を仕事にしている人が多く，冷水にひざまでつかって作業することによる関節に関する病気が多く発症するなど，周辺のさまざまな村の状況を知っていれば，チベット医は，眼前だけでは読み取りにくい，診断のための重要な情報をえることができる．

Ｔ氏の診断には，国境地帯タワンのそれぞれの村社会における生活の特徴が反映されていた．

毒を盛られた僧

タワンでも毒の話はきかれた．街で知り合った人々に尋ねると，彼ら自身も驚くことなく，チベット人たちと同様の語りをしたのである．

毒の話を整理すると以下の内容となる．村のある家に招かれた客はもてなしをうけるが，そこで毒を盛られる．それは村内の特定の家に限り世代継承される一種の信仰・風習のようなもので，その家には黒い旗が立てられている．毒を盛る相手はその信仰上の理由から高僧や役人など地位の高い者が選ばれる．毒を盛る方法には 4 通りあり，1）爪の隙間から　2）目から（邪視の類か？）　3）手から（衣服をさわる）　4）食事の香りから，盛られるというものである．

こうした語りは，「～と，きいている」「過去の話」というような伝聞がほとんどであったが，タワンへ行く途中のボンディラという

街で出会った僧（ブータン人，30 歳代）は，実際に毒を盛られたことがあると言って自らの話をしてくれた．

彼は，あるとき，仕事でタワンのある村を訪れた．家に泊めてもらい，「毒は入ってない」と言われて出された食事を安心して口にした瞬間，家の天井がぐるぐると回転した．それは 4 時間続き，持っていたチベット医学の高貴薬リンチェン・リルプを飲んで九死に一生を得たという．

毒とドングリ

毒の言説は，タワンのなかでも国境線近くの村々に対して，その外側の街に居住する Monpa やチベット人の口から語られた．ここからまずわかるのは，チベット世界そしてタワン内部に差異があるということである．チベット医が Monpa・チベット・ブータン 3 つの生活領域に分かれると語ったタワンの街と村，村と村は，さらに毒（の信仰）の有無によっても分かれている．

では，なぜ，人々の間で定型の語りが（ときに爪の隙間から盛るという行為つきで）されるのであろうか．帰国後，チベット医学教典『ギュー・シ』の毒に関する章に Monpa が登場していることがわかった．その「毒の運び方」という項目には，調査中きかれた 4 通りの毒を盛る方法と同じ内容が書かれていた．8 世紀に成立したこの教典が，現在と同内容に再編されたとされるのは 12 世紀である．タワンと毒はこのときすでにチベット世界で語られていたのであろうか．

さらに，医学教典には，薬の材料となる植物名に Monpa の名を冠したものがあることもわかった．そのひとつにドングリ（チベット語で「*Monchara*」）がある．ドングリはアッサム，ブータンから中国雲南省，日本にまで広がる湿潤な気候下の照葉樹林帯にあり，乾燥したチベット高原には元々ないものである．それがチベットの教典に Monpa の名を冠して記載されているということは，（あくまで私の憶測だが）ドングリがタワンからチベットへ運ばれたということを示しているのかもしれない．

チベットやヒマラヤ周辺の諸地域は，ヒマラヤ交易によって結ばれ，歴史を通じて人・モノ・情報の広範かつ活発な交流があった．ネパールのドルポ，ムスタン，北西インドのラダックなどと同様，タワンもヒマラヤ交易の中継地として発展した街なのである．交易を通じてチベット医学が展開していたと考えると，壮大な人とモノの移動の物語が浮かんでくる．国境だけではなく，照葉樹林帯とチベット高原地帯との境に位置するタワンで，毒の言説とチベット医学教典の記述，ヒマラヤ交易と薬草，これらの結びつきが少しずつではあるがみえ始めてきた．

毒を使いこなすということ

毒をどうとらえればよいだろうか．私は化学の分野に詳しくないので，毒について化学的視点を用いて論じることはできないが，言説の内容からは，毒を盛る者が呪術を含む多様な毒を駆使していることがうかがえた．

毒を使いこなすことは，世界中のさまざまな社会で狩猟や食，医療において非常に重要

な知識であるといえる．狩猟[1] では，矢に毒を塗るなど毒性が活用され，食では，自生植物の毒性が消され食用とされる技術が発展した．医療では，毒は薬に利用された．薬草とされる植物の成分には毒性をもつものもあり，毒性は微量を用いるなど工夫することによって身体にとっての薬となったのである．毒は，決して「完全な悪」ではなく，薬と表裏一体の関係にあることは重要な点である．

人々の間で語られた毒は，チベット医学と決して無関係なものではない．むしろ，交易，狩猟，食，薬といったキーワードを通じて密接なつながりをもったものである．

毒とともに暮らすことが村では身近な生活世界であった Monpa 社会において，照葉樹林という環境や狩猟，食，民間医療などを通じた毒を扱う知識や技術，彼らが利用する自然資源は，チベット医学に通じるものであったといえるだろう．境界に暮らす彼らの生活に寄り添うなかで，これまでとは別の視点からチベット医学像を描くことができるのではないかと考えている．

引 用 文 献

Solanki, C. S. and Pavitra Chutia. 2004. Ethno Zoological and Socio-cultural Aspects of Monpas of Arunachal Pradesh, *Journal of Human Ecology* 15(4): 251-254.

1）山奥の村に住む Monpa は狩猟を行なう．狩猟では，矢に植物性の毒が塗られるという報告がある [Solanki and Chutia 2004].

「聖地の旅」と震災

──日常世界とフィールドのあいだから──

濱　谷　真理子 *

「南インド聖地の旅：沈黙の聖者ラマナ・マハルシ」ー と銘打たれた「聖地の旅」は，「フシギ村」の人びとが 10 年前から 2 年に一度実施している恒例のツアーだ．彼らが訪れるのは，タミルナードゥ州のティルヴァンナマライというまちにある，聖者ラマナ・マハルシ（1879–1950）を祀るアーシュラム（修行道場）．そこでは，参加者は束の間ではあるが日常を離れ，思う存分瞑想にふけったり，マハルシが暮らしていた山を散策したりと，思い思いに聖地でのひと時を過ごす．しかし，今回のツアーは，3 月 12 日から 22 日までの約 10 日間，ちょうど東日本大震災の翌日に始まるものだった．震災の発生は，そ

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科